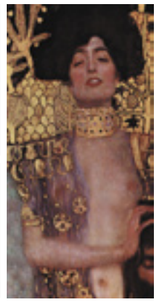
●征くシリーズ●取材・執筆・写真／本誌編集部

世界遺産

異文化と芸術の溢れる街

古都 ウィーンを征く



参考文献：『ハプスブルク家』（江村洋著・講談社刊）ほか
取材協力：ウィーン観光局
＊取材時にガイドをしていただいたオーストリア公認ガイドの淵野恵子氏には、市内案内だけではなく貴重な情報提供など多大なご協力をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

7月2日号にて「ハプスブルク家 憂いの美女～皇妃エリザベート～」を特集しました。王宮や宮殿など、皇室関連のアトラクションはこちらをご覧ください。バックナンバー（英国内は£3）もご注文いただけるほか、インターネット・ジャーニー www.japanjournals.com でご閲覧いただけます。

ヨーロッパ共同体としてのハプスブルク君主国

ハプスブルク家が十三世紀半ばから二十世紀初めという長きにわたり、ヨーロッパの政治、文化において欠かせない存在であったことは前々号でも述べた。その最たる理由は、同家が、ローマ教皇と並んで中世西ヨーロッパにおける最高支配者とみなされていた神聖ローマ皇帝を事実上世襲していたからにほかならない。勢力範囲は一時、ポルトガルからポーランド、ドイツからイタリアおよびバルカン半島と、東西南北、ヨーロッパのほぼ全域に及んだ。当然、そこには言語、文化を異にする民族が混在することになる。

「神聖ローマ帝国」というから混乱しやすいのだが、ローマ教皇が教義上の聖権を、皇帝が政権などの俗権を持つ、キリスト教を信仰するドイツ民族の国といったほうが分かりやすいだろうか。それは現在のドイツ、オーストリア、チェコ、イタリア北部を中心に存在していた政体で、首都はなく、大小の国家連合から成り立っていた。帝国の王位に就いた者はイタリアに赴き、ローマ教皇から帝冠を授かることで初めて皇帝となる。日本に置き換えるなら、ローマ教皇が天皇で、皇帝が将軍、諸国の国王が大名といったところだ。であるから、神聖ローマ帝国の流れを汲むオーストリア帝国も、それに続くオーストリア＝ハンガリー帝国も、「オーストリア」という名前は国名であって、民族を表すものでは決してなかった。

第一次世界大戦終了とともにオーストリア＝ハンガリー帝国が解体すると、それまで民族主義を声高に叫び、独立運動で揺れていたドイツ、ハンガリー、チェコ、クロアチア、スロヴェニア、ルーマニアなどの十二にのぼる諸民族は、待ってましたとばかりに続々と独立し、各々の小国家を築いていった。しかし、そのほとんどが財政難や急激な体制変革に直面し、ハプスブルク王朝統治時代の安泰を懐かしみたくなるほどの困難な状況に置かれた。それはかつての広大な領土を縮小され、小国に転落したオーストリア共和国においても同じだった。

帝国の解体と民族の独立は避けがたい時代の流れだったとはいえ、ある程度の自治権と独立性を各民族に認めてきたハプスブルク君主国のあり方は、ロシアなどの侵略から弱小民族を守り、言語や文化の違いを超えて統一を図る「ヨーロッパ共同体」ともいうべき頼もしい存在であった。それは現在の欧州連合（EU）の姿と重なるものがある。

実際、独立を訴えていた諸民族も、中央政府に不平不満をぶつけながらも帝国の存在自体はむしろ肯定しており、皇帝には厚い忠誠心を寄せていた。皇帝をかすがいに、異なる民族がそれぞれに「自立」した「仲間」として協力しあう体制が長く続いていたのである。

「民族」とは一般に、言語を始めとする文化や歴史的背景を共有するものであるとされるが、その観点からいえば、ドイツ語を母国語とする現在のオーストリアはドイツと民族を一にしており、ドイツに併合される可能性が十二分にあった。事実、第二次大戦中にはナチス・ドイツに一時吸収されている。

ちなみにナチス・ドイツの独裁者、アドルフ・ヒトラーは、一九三二年にドイツ国籍を取得するまで、生まれも育ちもオーストリアという、れっきとしたオーストリア国籍の人物であったことは特筆しておくべきだろう。彼は、ドイツとオーストリアがひとつになりドイツ民族の国になることを願う、いわゆる「大ドイツ主義」を掲げ、ハプスブルク家の非ドイツ系諸民族を包含し、多民族国家として機能しようとする考えに強い憎悪を抱いていた。そして、一九一三年にはオーストリア＝ハンガリー帝国の兵役を逃れてミュンヘンに移住し、バイエルン王国（ドイツ帝国を形成する連邦国家）の軍隊に入隊するのである。

尖塔が天高くそびえ立つ市庁舎
©WienTourismus /F3　Legend: City Hall

オーストリアが二つの大戦において、ドイツへの併合・吸収を頑なに拒んできたのは、ハプスブルク家が守り抜いてきた多民族国家の思想を堅持しようとする意向と、悪名高いナチス・ドイツとの決別を図るためにほかならない。こうして、オーストリア共和国（以下、オーストリア）は第二次大戦後、連合国列強四ヵ国の分割占領の時代を経て、スイス、トルクメニスタンと共に現在、永世中立国となっている。

コスモポリタンの街

ウィーンの街並みを見ると、多民族国家としてオーストリアのルーツを探ることができる。まず、街に彩りを添え、観光の大事な足休めともなっているカフェ。これは、十六世紀、十七世紀とウィーン侵略を試みたオスマン帝国の軍隊が大量に残していったコーヒー豆によって生まれた文化だ。ウィーンはヨーロッパのカフェ文化発祥の地とも言われているのである。

また、環状道路「リングシュトラーゼ」沿いには、歌劇場、市庁舎、美術館、博物館、劇場、大学などの豪華壮麗な公共建造物が並んでいるが、これらは、皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の時代にウィーンを囲んでいた城壁を取り壊し、新たな都市計画を行う過程によって完成したもの。イタリア・ルネサンス様式、古典ギリシャ様式、ゴシック様式など、多様な過去の建築様式を取り混ぜて建てられている。さまざまな時代性、地域性を取り込み、多民族共生・多文化共存の方針のもと、ウィーンをコスモポリタンの巨大都市にならしめようとする皇帝の願いが反映された賜物なのだ。この建造物群は、シュテファン大聖堂やホーフブルク宮殿、ベルヴェデーレ宮殿などと共に、現在「ウィーン歴史地区」として世界遺産に登録され、観光の欠かせないスポットになっている。

その他、宮廷文化が古くから発達したウィーンには、ハプスブルク家が残した文化的遺産が其処ここにある。現在、世界最高峰と謳われるウィーンフィルハーモニー管弦楽団、ウィーン宮廷歌劇場合唱団男性団員、ウィーン少年合唱団からなるウィーン宮廷楽団は、十五世紀の神聖ローマ皇帝マクシミリアン一世により創設されたもので、五百年以上もの歴史を誇る。さらに十八世紀には音楽好きのマリア・テレジアが作曲家を支援したことで、宮廷音楽家を目指す作曲家がウィーンに集まり、モーツァルト、ハイドン、ベートーベンといった偉大な作曲家たちが続々と生まれた。これが、ウィーンが「音楽の都」と称えられる所以である。芸術においても同様で、歴代の皇帝が芸術保護に乗り出し、マクシミリアン一世がデューラーを、カール五世がティツィアーノを、フェリペ四世がベラスケスを庇護した経緯などから、ヨーロッパ中の名画がウィーンに集結した。

ウィーン国立歌劇場（国立オペラ座）

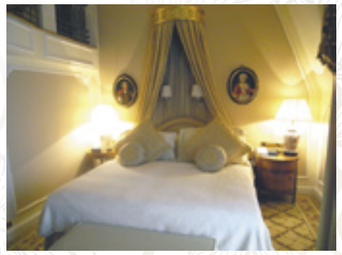
また、宮廷文化から生まれたものではないが、十九世紀末には、グスタフ・クリムト、エゴン・シーレ、オットー・ヴァーグナーなどが権威と伝統に反抗する形で新しい芸術を生み出し、モダン・デザインの先駆的役割を果たしている。

北海道とあまり変わらない面積で、全人口は東京二十三区の人口とほぼ同じ約八百四十万人、人口密度は岩手県や秋田県に近いというオーストリア。かつてはヨーロッパ全域にわたる勢力を誇っていた国も今はヨーロッパの小国という控えめな存在にとどまっている。にもかかわらず、その首都ウィーンは大都市ロンドンやパリにも勝るとも劣らない見所に溢れている。人気の観光目的地ランキングでも必ず上位に食い込んでくるのは、ハプスブルク家による文化的遺産が人々を魅了してやまないからにほかならない。そして、その背景に多民族を包含してきた懐の深さを見ることができたら、ハプスブルク家の偉大さに、さらに敬意を表したくなるに違いない。

フォルクス庭園から望むブルク劇場

ホテル インペリアル
Hotel Imperial Vienna

豪奢な雰囲気がハプスブルク家の宮廷生活を思わせるロイヤル・スイート。各国の王侯貴族が宿泊したほか、先月急逝したマイケル・ジャクソンなどの著名人も宿泊したことで知られる。



メゾネットスイートは、曲線が美しい螺旋階段が、ギャラリー階のリビングと、下階の落ち着きのある寝室＝写真＝とを結んでいる。

もともとはヴュルテンベルク王国の王子の居城として建てられた館を1873年に開催された万博に合わせ、迎賓館兼ホテルとして改装し、オープンしたもの。オープン当初から今も、各国の王侯貴族や著名人たちが宿泊者として名を連ねる。2002年には天皇皇后両陛下も滞在された。全138室のうち、8室がスイートルームで各々、豪華な内装が施されている。ホテルというより、宮殿の一室に迷い込んだような趣。「ザッハー・トルテ」と並び、ウィーンの銘菓として知られる「インペリアル・トルテ」は同ホテルで作られている。常温でも数週間日持ちするので、お土産にも便利。

アメニティ・グッズはすべて「ブルガリ」のものを使用。

付属のインペリアル・レストランには皇帝フランツ・ヨーゼフ1世や皇妃エリザベートの肖像画＝写真＝がかけられている。

エリザベス・スイートは、ドレッシングルームとベッドルームを鏡の扉で仕切れるようになっている。涼しげなブルーが繊細な印象を与える。

Hotel Imperial Vienna（Map 上①）
Kärntner Ring 16, A-1015 Vienna
Tel. +43-1-501-100
最寄駅　Karlsplatz
www.starwoodhotels.com/luxury/property/overview/index.html?propertyID=97
www.imperialtorte.at

Market

Naschmarkt
ナッシュマルクト

ウィーン最大の市場として有名なナッシュマルクトには、一瞬、ウィーンにいることを忘れてしまうような世界が広がる。トルコ系の移民たちによる、野菜、魚、肉、香辛料、菓子などのストールが立ち並ぶほか、それらの食材を使った食事処も数ヵ所あり、大人気。伝統的なオーストリア料理よりも日本人の口に合うものが見つかりそう。

Naschmarkt ⑪
月―金　6am-6:30pm
土　6am-5pm
最寄駅 Karlsplatz / Kettenbrückengasse

Flohmarkt
フローマルクト

いわゆる蚤の市で、英国でのカーブーツ・セールに近く、電化製品から衣類、食器、本など、ありとあらゆるものが売られている。掘り出し物が見つかる可能性もあるが、中にはただのガラクタにしか見えないものも。ウィーン庶民の生活を垣間見られる機会として訪れてみては。

Flohmarkt ⑫
土　8am-6pm　最寄駅 Kettenbrückengasse

あなたのブログをジャーニーのホームページにリンクしませんか？

個人ブログ大募集!!

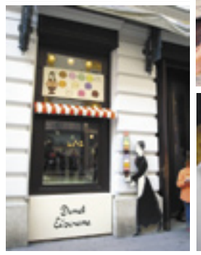
現在、インターネット・ジャーニーへのアクセス数は月平均約11万。
あなたが発信している英国での生活に関するブログを、
今よりちょっぴり多くの方にご覧いただくためのお手伝いができるかもしれません。
営利を目的としていない個人のブログであれば、リンクはもちろん無料です。
お申し込みはインターネット・ジャーニー「個人ブログの部屋」をご覧ください。

※掲載にあたり、事前に一定の審査をさせていただきます。内容によってはリンクをお断りしなければならない場合もございます。予めご了承ください。

インターネット・ジャーニー

www.japanjournals.com

Cafe



Demel
デーメル

ケーキの種類の多さでウィーンNo.1を誇る老舗。1786年創業で、こちらも王室御用達で長くハプスブルク家がひいきにしていた店として知られる。奥にガラス張りの部屋があり、ケーキ作りの実演を見ることができる。ケーキの他にもパッケージの美しいチョコレート菓子やスイーツがいっぱい。

Demel ②
Kohlmarkt 14
Tel: +43-1-535 17 17 30
最寄駅 Stephansplatz / Herrengasse
www.demel.at

モーツァルトシュニッテ
3.90ユーロ

Gerstner
ゲルストナー

1847年創立の王室御用達のカフェ＆コンデトライとして有名な「ゲルストナー」。「コンデトライ」は菓子屋の意で、ケーキはもちろん、パイやチョコレートなどの豊富なスイーツを取り揃えている。その他、カナッペやサンドイッチなどのパーティースナックもケータリングしており、国立オペラ座にビュッフェも出店している。

Gerstner ③
Kärntner Str 11-15 Tel: +43-1-512 49 63
最寄駅 Stephansplatz
www.gerstner.at

Sacher
ザッハー

ウィーンのケーキの代名詞、ザッハー・トルテが生まれたホテル・ザッハーのカフェで、ぜひオリジナルの味を楽しんでみよう。ショップにはギフト用の箱詰めトルテがあり、日本にも郵送可能。

Sacher ④　Philharmonikerstr 4
Tel: +43-1-514 560 最寄駅 Karlsplatz
www.sacher.com

Mozart
モーツァルト

モーツァルト・トルテ
3.90ユーロ

ザッハー・トルテ 3.90ユーロ

マリア・テレジア（オレンジリキュール入りのモカ）
6.50ユーロ

アップルシュニッツェル
3.90ユーロ

オペラ座のそばにある1794年創業の同店は、映画『第三の男』に登場したことでも有名。ケーキの他、食事を楽しむこともできるので、いつも観光客で賑わっている。

Hawelka
ハヴェルカ

芸術家やジャーナリストたちの溜まり場として知られる伝説のカフェ。100年前からほとんど変えていないというボロボロの内装が、他店では味わえない趣を出している。ケーキ店ではないが本格派のコーヒーの他、アルコールも楽しめる。

ホイップクリームをのせたモカコーヒー「アインシュペナー」。日本のウィーンナーコーヒーはこれが元になっている。

Hawelka ⑥
Dorotheergasse 6
Tel: +43-1-512 82 30
最寄駅 Stephansplatz
www.hawelka.at

店内にはタバコや葉巻の煙が…。昔懐かしいカフェの雰囲気。

Restaurant

Esterhazykeller
エスターハージーケラー

ケラーは地下室（セラー）のことで、17世紀にエスターハージー家の所有するワイン貯蔵庫を店にしたもの。良質のオーストリアワインはもちろん、美味しいビールが楽しめる。店内は外観からは想像できないほど広く、グループでの食事にも便利。安くて庶民的な店。

油のぎとぎと感におののきつつも、その柔らかさ、ジューシーさに平らげてしまったポーク。これでもか、というほどに盛られたマッシュポテトといい、豪快。

Esterhazykeller ⑦
Haarhof 1 / Naglergasse 9
Tel: +43-1-533 34 82 最寄駅 Herrengasse
www.esterhazykeller.at

Plachutta
プラフッタ

プラフッタは、ウィーン市内に5店ある高級オーストリア料理店。こってりずっしりとしたウィーン料理が多い中、日本人の口に合うと思われる繊細さ、奥ゆかしさが感じられるのが同店名物のターフェルシュピッツ（牛肉煮込み料理）＝写真下。皇帝フランツ・ヨーゼフ1世や皇妃エリザベートもお気に入りだったという。長時間煮込んだ肉はしっとり柔らかく美味で、ブイヨンのきいたスープも絶品。

煮込んだ時の銅鍋のままサーブされ、ホースラディッシュ（西洋ワサビ）やサワークリームをつけていただく。付け合せはジャガイモとホウレン草のペースト

デザートも美味しい

牛肉を煮込んだスープを、卵クレープの細切りに注いだ「フリッターテンズッペ」でスタート。

Plachutta ⑧
Wollzeile 38
Tel: +43-1-512 15 77
最寄駅 Stubentor / Stephansplatz
www.plachutta.at

Weibel 3
ヴァイベル・スリー

こぢんまりとした店内はモダンで洗練された雰囲気。伝統的なウィーン料理のほか、地中海料理も注文できる。盛り付けも美しく、デートなどでも使用できそう。

ウィーンの名物料理として名高い仔牛肉のカツレツ「ヴィエナシュニッツェル」（左）と前菜のチロリアンラビオリ（右）

Weibel 3 ⑨　Riemergasse 1-3　Tel: +43-1-513 31 10
最寄駅 Stubentor / Stephansplatz　www.weibel.at

Gigerl
ギゲル

新酒ワインの酒場として知られるホイリゲはウィーン北部に集中しているが、中心街にあり、夜遅くまで開いていて便利なのが同店。自家製ワインとウィーンの伝統料理が売り物。

お得な3コースは野菜のフライ盛り合わせ、ハムの盛り合わせにサラダ、ザワークラウトと食べきれない量に愕然！

Gigerl ⑩
Rauhensteingasse 3
Tel: +43-1-513 44 31
最寄駅 Stephansplatz
www.gigerl.at

St Stephen's Cathedral
シュテファン寺院

12 世紀に建造が始まり、16 世紀初頭に完成した。ウィーンの中心街のランドマーク的な存在。観光客もこの寺院を目印に動くことが多いだろう。屋根には美しいモザイクが施されている。ハプスブルク家の慣習で、同家の人物が死ぬと、内臓を同寺院に、心臓をアウグスティーナ教会に、遺体をカプツィーナ教会に分けて納めることになっている。モーツァルトの結婚式と葬儀が行われたことでも有名。

St Stephen's Cathedral
Stephensplatz ⑲
最寄駅 Stephensplatz
月―土　6am-10pm
日・祭 7am-10pm
入場料無料
内部のガイドツアー、カタコンベのガイドツアー、北の塔へのエレベーターおよび南の塔への階段利用は有料

Nationalbibliothek Prunksaal
国立図書館

王宮敷地内にある宮廷図書館。大理石の壁や柱、中央のフレスコ画をあしらったドーム型の天井など、荘厳な雰囲気が漂う。奥行き 80 メートル、高さ 20 メートルの世界で最も美しい図書館と称えられる。蔵書は約 20 万冊、宗教改革者のマルティン・ルターの膨大な蔵書も収められている

Nationalbibliothek Prunksaal ⑳
Josefsplatz 1
Tel: +43-1-534 10 464
最寄駅 Herrengasse
火―日　10am-6pm
木　10am-9pm
大人　7 ユーロ
学生割引 4.50 ユーロ
www.onb.ac.at

移動の足

ウィーンの街には地下鉄 U-Bahn、路面電車 Straßenbahn ＝写真、バス Bus が運行されており、非常に便利。すべてウィーン公共交通連盟に属しているため、乗車券も共通で、有効時間・範囲内であれば、地下鉄から路面電車、バスから地下鉄の乗り換えも自由自在だ。2 泊 3 日の観光にはウィーン 72 時間フリーパス（18.50 ユーロ）が断然お得。名所、カフェ、レストラン、ホイリゲ（新酒をサーブするワインバー）、ショッピングなどでの割引その他の特典まで付いている。

Secession
分離派会館セセッシオン

©WienTourismus / Claudio Alessandri Legend: Secession

「黄金のキャベツ」が地元での愛称のセセッシオンは、金細工を施したユニークな建物。19 世紀に皇帝や貴族の保護を受けず、アカデミーに反して新しい芸術の波を起こそうとした芸術家たちの一派である「ウィーン分離派」の作品発表の場として創設され、今も無名アーティストの展示会を行っている。同派の先導者であるグスタフ・クリムトの壁画「ベートーベン・フリーズ」を地下で見ることができる。

Secession ⑬ Friedrichstr 12
Tel: +43-1-587 53 07　最寄駅 Karlsplatz
火―日　10am-6pm　大人 5 ユーロ　www.secession.at

Wagner's Stadtbahn-Pavilion
カールスプラッツ駅＋オットー・ヴァーグナー・ミュージアム

これが駅？と疑うような、アーチ型の屋根に金の装飾を施した建物は世紀末を代表する建築家オットー・ヴァーグナーによるもの。カフェやヴァーグナー美術館もあり、実際に駅として使われている。

Wagner's Stadtbahn-Pavilion ⑭
Karlsplatz 1
最寄駅 Karlsplatz
4 月― 10 月の火―日　9am-6pm

Kunst Historisches Museum
美術史博物館

大胆にイーゼルを立て、模写をする人もちらほら見かける。

パリのルーブル、マドリッドのプラドと並び、ヨーロッパの 3 大美術館のひとつ。エジプト、ギリシャ、ローマの彫刻美術もあるが、やはり目玉は 2 階のヨーロッパ絵画。ブリューゲル、デューラー、フェルメールなどドイツ系の画家はもちろん、ヨーロッパ中の名作が並ぶ。また 2 階ホールにはカフェ「ゲルストナー」があり、雰囲気もよく足休めに便利。

Kunst Historisches Museum ⑯
Maria Theresien-Platz
Tel: +43-1-525 24 4025　最寄駅 Museumsquartier
火―日　10am-6pm　木 10am-9pm
大人　10 ユーロ　学生割引　7.50 ユーロ
ファミリーチケット（大人 2 人＋子供 3 人まで）20 ユーロ
オーディオガイド　3 ユーロ
www.khm.at

大階段の壁の装飾画はクリムトによるもの。

Majolikahaus
マヨルカハウス

こちらも代表的なオットー・ヴァーグナーの作品で、イタリアのマジョルカ焼きタイルをあしらったアパート。花模様が目を引く。

Majolikahaus ⑮
Linke Wienzelie 40
最寄駅 Kettenbrückengasse

Staatsoper
ウィーン国立歌劇場（国立オペラ座）

ウィーンはなんといっても音楽の都！　モーツァルト、ベートーベン、シューベルト、シュトラウス、ハイドンなど名だたる作曲家が活動していた町で、オペラ座は彼らの魂が宿る場所ともいえる。1869 年創設、第二次世界大戦で一時閉館を余儀なくされたものの 1955 年に再オープンし現在に至る。ミラノ、パリとともに世界 3 大オペラ座のひとつに数えられる。わが国の誇る世界的指揮者、小澤征爾氏が音楽監督を務めていることはあまりにも有名。人気の公演でも、立ち見の当日券（4 ユーロ）は開演の 2 時間前から並べばほぼ確実に手に入るとか。そのほか、オペラ座内部の日本語による見学ツアーは 1 日に 1 回（大人 6.5 ユーロ、所要時間 45 分程度）行われている。
尚、バレエおよびオペラ公演はもちろん、ハプスブルク王朝時代から続く伝統行事の舞踏会も毎年冬に開催されており、観光客も参加できるイベントとして人気。

Wiener Staatsoper ⑰ ウィーン国立歌劇場（国立オペラ座）
Opernring 2　Tel: +43-1-514 442 250
最寄駅 Karlsplatz　www.wiener-staatsoper.at

TBA21
ティービーエー 21

前衛的なインスタレーションなど、コンテンポラリー作家を中心にエキシビションを行う TBA21 は、ウィーンの現代美術の先導的な役割を果たす。

TBA21
Thyssen-Bornemisza Art Comtemporary ⑱
Himmelpfortgasse 13
Tel: +43 1 513 98 56　最寄駅 Stephansplatz
火―日　noon-6pm
入場料無料　www.tba21.org

Haydnhaus
ハイドンハウス

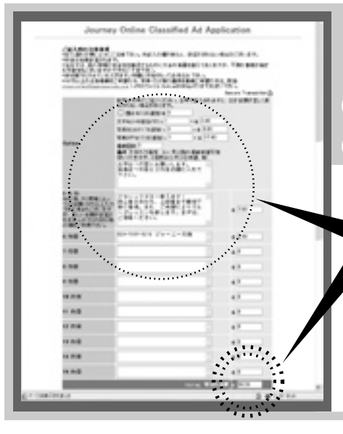
©WienTourismus / Gerhard Weinkirn Legend: The Haydnhaus

今年は、ウィーンの誇る作曲家ヨーゼフ・ハイドンの没後 200 周年にあたり、ハイドン記念館もリニューアルオープン。彼が住んでいた家に直筆の楽譜や愛用したピアノなどが展示されている。

Haydnhaus（地図外）Haydngasse 19
Tel: +43-1-596 13 07　最寄駅 Westbahnhof
火―日・祭日 10am-9pm
大人　2 ユーロ　学生割引　1 ユーロ
www.wienmuseum.at

週刊ジャーニーでは、
皆さまからの投書をお待ちしております。
（週刊ジャーニーを読んでのご意見・ご感想、英国でのおもしろ学校体験、大好きなテレビ番組や芸能人の話などなど、お気軽にお寄せください。）

あて先
WEEKLY JOURNEY
JAPAN JOURNALS LTD
7-8 MARKET PLACE
LONDON W1W 8AG
E-MAIL:
info@japanjournals.com



ジャーニーのクラシファイド・アドなら
お申込みからお支払いまでオンラインでラクラク
掲載料はその場で自動計算
通常締切に間に合わなかった方のために、
Express、Super Express（追加料金がかかります）もご用意しています。
詳細・お申込みはこちらをご覧下さい。
www.japanjournals.com
ご利用頂けるカード
Switch / Maestro / Solo
Delta / Master / Visa / JCB
American Express
Japan Journals Ltd
Journey Classified Dept.